

名戸ヶ谷ビオトープだより

第 53 号 2013 年春号

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会 発行

<http://nadogaya-biotope.org/>

発行責任者：篠崎 将 Tel/Fax 04-7173-6353

ニホンアカガエルの卵塊調査

2月20日、ビオトープの春の訪れの兆しであるニホンアカガエルの卵を、うるち田5番と三角池で発見したとの知らせで今年も調査を開始しました。2月21日から3月24日まで9回実施し詳細は下記の通りです。今年2月は寒い日が続き3月になりようやく春らしい陽気となりました。

卵塊のピークは3/7と3/20です。昨年ピークは3月11日の39個(A:33、B:6)、一昨年の2月20日63個と比べると減少しつつあります。特にBゾーンでは増えておりません。気象状況か、周辺環境の状況か原因は不明ですが今後の懸念材料です。孵化した小さなおたまじゃくしが群れて元気に泳ぎ回っています。無事にアカガエルへと育てて欲しいものです。(藤平 三郎)



ニホンアカガエルの卵塊



3月7日の分布



3月20日の分布

(A: Aゾーン・ B: Bゾーン)

月 日	卵塊数	天気等	特記
2月21日(木)	3 (A: 2 B: 1)	晴れ、風が冷たい	
2月24日(日)	3 (A: 2 B: 1)	晴れ、北西の風強し	
2月28日(木)	4 (A: 3 B: 1)	晴れ、暖かな日	
3月3日(日)	29 (A: 28 B: 1)	晴れ、風も収まり暖かな日	もち田 No1.2.3 うるち田 No2.3.4.5.6
3月7日(木)	32 (A: 31 B: 1)	晴れ、気温 18 度と春本番	うるち田 No5 では孵化が始まる
3月11日(月)	20 (A: 19 B: 1)	晴れ、寒い日	殆ど卵塊は崩れて散らばり孵化中
3月16日(土)	0 (A: 0 B: 0)	晴れ、春うらら	卵塊確認出来ず
3月20日(水)	38 (A: 36 B: 2)	曇り、暖かな日	カエル整備用池に 2 個発見
3月24日(日)	23 (A: 21 B: 2)	曇り、花冷え	卵塊は崩れ孵化中

Aゾーン作業用木道を延長しました

稲作作業用の木道がAゾーンを南北に繋いでいますが、看護師寮駐車場側の一部が未了でした。2月に最終の5m程を完成させました。これで作業用木道は完了です。今後は傷んだ木道の補修を継続的に行っていきます。



今年第1回目の合同作業です

3月16日暖かい春の日差しの中で、今年最初の合同作業を実施しました。田んぼの畔の補修と水路の整備作業です。各田んぼの水門周りの補修や、田んぼに垂れ下がった草の刈り上げ、倒れた波板の補強など力仕事で汗をかきました。菜の花が咲き、ヒキガエルの出現もあり、田んぼは春一杯でした。

(早朝にはカモが田んぼで餌を漁っています)

(小笠原 智)



逆立ちして餌を食べていました



水路周りの枯れ草を撤去し堀上げました



菜の花の下で田んぼの畦周りを整備しました

「名戸ヶ谷ビオトープを育てる会」 発足10周年記念誌 編纂中！！

平成24年3月の第110回の幹事会で、会長より「会の発足10周年の記念事業」の一環として「記念誌」を作ることが提案されました。

何故か、佐々木、藤平幹事と共に私の名前も挙がり、企画委員としての「記念誌」づくりがスタートしました。

平成24年4月に第1回の企画打ち合わせ会を行い

- ・「ビオトープを育てる会」の発足の経緯、10年間の活動状況の詳細記録等が網羅された集大成版とすること
- ・会の後継者への橋渡しとなる「白書」としての位置づけであること
- ・記録中心とするため、会員夫々の「10周年への思い」は織り込まないこととすること

等が基本方針として打ち出されました。

早速、5月の幹事会において、基本方針が了承され、藤平編集長のまとめた大筋の「目次」に従い、各項目の執筆担当者が決められ、9月末の原稿提出に向けて作成が進められました。

記念誌の内容は

- 第1章 発足の経緯
- 第2章 ビオトープの周辺環境の推移
- 第3章 稲作
- 第4章 生きもの
- 第5章 植物
- 第6章 子供と市民の交流
- 第7章 歴代会員の動き
- 第8章 広報活動

の構成です。

原稿は各担当者のご努力で、殆どが9月末に提出され、初稿が出来、全体の編集作業に入りました。

編集を進めるに当たり、体調を崩された高田さんのリタイアは大変な

痛手でしたが、これまでの「ビオトープだより」に大いに助けられ、先輩の方々の功績に感謝しました。

打ち合わせは、主に駅前の市民センターでパソコンを持ち込んで行われ、ここでも編集長の的確な指示と作業後の「居酒屋」での貴重な意見交換もあり順調に作業が進められ、全体で100頁の記念誌のゲラ盤が出来上がりました。平成25年2月～3月に数回、修正を繰り返し、CD盤も出来ました。

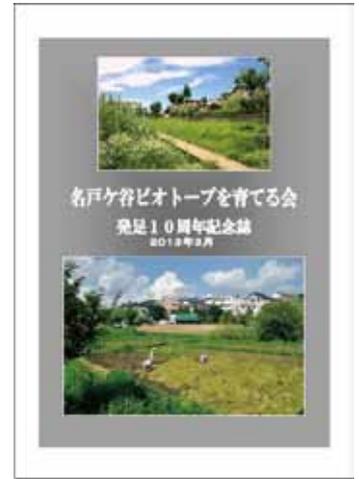
最終の印刷は、岡田印刷（株）の他にも相見積を取る等、少ない予算とにらめっこしながら、部数、製本のグレードを決め、全体で70部、CD盤3部を岡田印刷（株）でお願いすることにしました。

この「記念誌」は素晴らしい製本とまでは行きませんが、内容は充分満足戴けるものと確信いたします。

4月の中旬には皆様のお手元にお届け出来るかと思えます。ここに、「記念誌」作りご協力戴いた皆様には心から感謝申し上げます。

編集委員会委員一同

（久米 正宏）



ビオトープと私

春山房子さん

ビオトープ

湧水の出る湿地ビオトープ

みどりの日に

おたまじゃくし観察会がありました

シュレーゲルアオガエルがコロコロと

いい声でなっていました

湿地には タンポポ、カラスノエンドウ

イヌスギナ、タネツケバナ、オオイヌノフグリ、

タチイヌノフグリ、セリ、ナスナ

湧水の近くには水芭蕉

日本の春がいっぱいありました

ボランティアで耕した水田は

まもなく田植えが始まります

不耕起栽培の田植えはそのあとです

晴れた日の今日

カモが二羽訪れました

どこから飛んできたのでしょうか

ホタルが飛び交う日まで

あと何年かかるでしょう

その日がとても楽しみです

(2003年4月29日)

今から丁度10年前に作った拙い詩です。「おたまじゃくし観察会」の記事はビオトープだより第1号(2003/5/30発行)の1ページに掲載されています。そのときの写真は私の後姿が大きく、講師の顔は蟻のように小さく写っていて、カメラマンの未熟さを物語っています。ちなみにその時のカメラマンは夫(秀雄)です。

10年前、私は退職後の第二の人生を模索していました。丁度その頃、広報かしわに名戸ヶ谷ビオトープを育てる会の会員募集記事があり、それに応募したのがスタートです。会の発足と同時に「だより」の広報担当になり、パソコンを買い夫と二人三脚で1号から38号(2009/8月)まで隔月で発行してきました。現地への取材、寄せられた原稿の推敲、文字入力、レイアウトや写真の挿入は私と、二人で分担し合い、慣れてきた頃には原稿さえ揃えば2日間で仕上げることができるようになりました。発行予定日の直前には夕食のおかずも貧弱になったり、徹夜となったりもしましたが、仕上がった時は安堵感と共に喜びもひとしおでした。夫の心臓病手術に伴い広報担当を降りてからは肩の荷も下りて、家族の介護に時間を費やすことが多く、ビオトープの活動への参加も難しくなっていました。

ビオトープはほっとする空間、自然が大好きな人が集う場所、労をいとわず無償の奉仕が支える場所です。ここで出会った多くの人の笑顔や活動していた姿が目には浮かびます。柏の市街地に残された貴重な生き物の住処、そこに集う貴重種のような人が、これからも絶滅することのないよう皆で支えあっていきましょう。

ビオトープの鳥：キジバトとドバト

国内各地で身近に見られるのはハトといえば、キジバトとドバトです。特に都市部で身近な鳥のひとつです。キジバトは「山鳩」とも呼ばれるように、かつては丘陵地帯の山林に生息していましたが、1960年代から市街地に進出しはじめ、現在では街路樹や住宅地の庭木で営巣するようになりました。キジバトはもともと住宅地に生息していましたが、空気銃の標的とされたため市街地から姿を消し、その後、空気銃が規制されると再び市街地に戻ってきたと言われています。



キジバト

ドバトはカワラバトを家禽化したものが野生化した鳥で、野鳥ではありません。しかし本来の生息地である乾燥地帯岩場とコンクリートに建物が建つ都市部の環境に共通点を見出したことと、人からエサをもらうことで個体数を増やし、現在では都市部の生態系の重要な位置をしめています。



ドバト

冬に木の葉が落ちた街路樹などに雑な作りの巣を見かけることがあります。小枝を重ねただけのスキマだらけの巣で、卵が落ちてしまいそうな巣です。ドバトの巣も雑な作りで、枯れ草などを申し訳程度敷いてあるだけです。巣は橋桁や建物の屋根の隙間のような人工物にもつくられ、年間を通じてねぐらとして使われます。

繁殖は一般に春から夏にかけて行われます。これは雛の餌となる昆虫類、特にチョウやガの幼虫が大量に発生するからです。しかし中には秋や冬といった季節外れに繁殖することがあります。この時期は豊富なエサがなく、どのようにしているのでしょうか。ハトの仲間は雛を育てるときに、そ嚢（のう）の内壁の崩れて、ミルク状になったものを与えています。いわゆる「ピジョンミルク」といわれるもので、雄も雌も分泌することができます。そのため他の鳥のように餌を探す必要がなく、季節を問わず繁殖できるのです。

求愛行動はキジバトもドバトも同じです。“クッカー、クッカー”と優しい声を出して頭をふり、尾羽を広げて相手に近づいていきます。キジバトは首の青い縞模様を、ドバトは首筋の虹色に光る羽毛を目だたせると、お互いに嘴で相手の羽をつくろったり嘴を触れ合ったりします。この行動は「相合羽づくろい」と呼ばれ、ほほえましい姿です。また天気の良い日に、舗装道路や砂地などに座り込んで翼や尾羽を地面につけるようにして広げてじっとしている姿を見ることがあります。これは日光浴で、羽の隅々まで日光が当たるような姿勢であることが解ります。ハト類の水浴びは、他の小鳥たちのように水を跳ね上げることはなく、水の中にじっと座っている独特のものです。

(篠崎 将)

早春の花

ビオトープの湿地で、真っ先に咲く花はハンノキです。ハンノキは湿地に生える木ですが、写真のものは外部から持ってきた植栽ものです。ところで、今年 ビオトープ生まれのハンノキが見つかりました。Bゾーンの小池の縁に生えた低木にハンノキの花が咲いたのです。この付近には、昔 ハンノキ林がありました、その名残がビオトープで顔を出したのです。



ハンノキ（植栽）



ハンノキ（自生）



カワヤナギ雄花



カワヤナギ雌花

ハンノキに続いてカワヤナギが咲きました。カワヤナギは雄株と雌株に分かれていますが、ビオトープではそれぞれ3本ずつあります。写真のように、植物では一般的に雄株の方が美しく、雌株は地味です。

そして、ついにタネツケバナが咲き始めました。ビオトープで最初に咲く草本です。タネツケバナがいたるところに咲きだすと、春も本格的になります。（佐々木 光正）

タネツケバナ



名戸ヶ谷ビオトープに来てみませんか？

交通：柏市東口より東武バス（1番乗り場）「名戸ヶ谷行き終点（名戸ヶ谷病院前）」下車すぐ
面積：約 4,400 m² 湿性生物：57 種 生きもの：125 種（内、千葉県指定保護生物 24 種）
（2006 年、年間を通じて観察した生きものの種類）